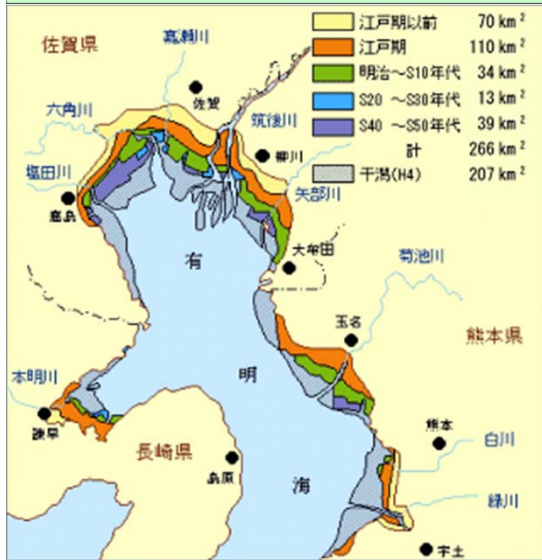


**NPO法人有明海再生機構の報告では、潮受堤防締切りによる有明海の潮流の変化はほとんどないとされており、西海区水産研究所の報告においても潮受堤防締切りと有明海の環境変化との因果関係を否定**

**NPO法人有明海再生機構の報告**



●1997年の諫早湾締切で諫早湾及び島原湾沖で大きな潮流の低下が見られるが、有明海湾奥部での潮流変化は見られない。湾奥部は(福岡、佐賀の干拓)1980年代までに行われた干拓による海岸線の変化の影響で潮流が減少している。

●湾奥部の潮流の変化に関しては、湾奥部の地形変化の影響(佐賀県の干拓等)が最も大きく、2番目にf値の極大値と極小値の変化(月の18.6年周期の昇交点移動)による影響が大きく、諫早湾潮受け堤防の影響はほとんど見られない。

NPO法人有明海再生機構の中間まとめ(抜粋)

●「2000年のノリの色落ち被害については、これは締め切りとは直接関係なくて、非常に特異な特別な赤潮、リゾソレニア(植物プランクトンの大型珪藻類)という普通に現れない様なものが、ある環境条件の中で異常に繁殖して、大規模なノリの色落ちを起こした。そのことについては、皆さんそういうものだとして理解しています。ですから、直接、締め切りとは関係ないだろうと認識です。」

諫早湾潮受堤防開門調査と有明海異変問題シンポジウム(H24.3.17)

における有明海再生機構理事長コメントより

**西海区水産研究所の報告**

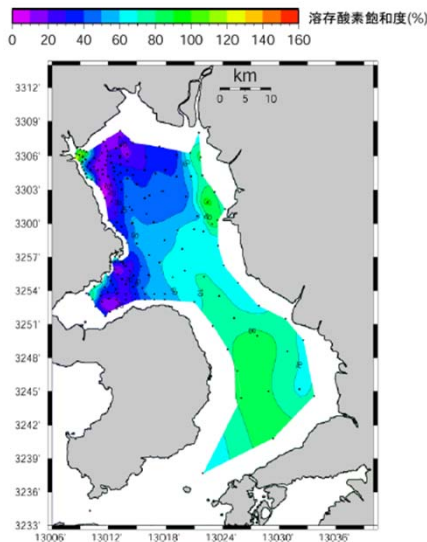


図2 2012年底層溶存酸素飽和度

●一斉観測の結果、有明海奥部と諫早湾を中心に大規模な貧酸素水塊が同時に別に形成されることが明らかになり、貧酸素化の領域がおおよそ特定できました。

●既往の研究から有明海奥部では、筑後川からの出水等により大量に流入した栄養塩を利用して植物プランクトンが増殖し、その後植物プランクトンは枯死し底層に沈降して堆積・再懸濁を繰り返しながら西部海域に輸送されることが明らかになっています。その過程においてバクテリアによって溶存酸素が消費されると考えられており、一斉観測の結果はこれらの知見を裏付けるものでした。

独立行政法人 水産総合研究センター西海区水産研究所より